

無属性魔法しか使えない落ちこぼれとしてほっといてください

# リーフエの祝福

# 1



### シェリナ

ユイの母親。ユイの実父と離婚後はレイスと再婚し、カーティス伯爵夫人に。優しくのんびりとした性格。



### レイス

シェリナの再婚相手。“魔王”と恐れられる気迫と、腹黒い政治手腕を持つ。だが、シェリナとユイにはデレデレ。



### ユイ

生まれつき無属性魔法しか使えない“リーフェ”という体質で、髪や瞳の色素が薄め。見た目の印象に反して芯が強く、魔法への探求心は人一倍。



### フィリエル

ガーラント国の第二王子。生まれつき魔力が強く、剣の腕も優れている。ある理由から、人との接触を避けている。

## 登場人物 紹介



## エリザ

王弟の娘で公爵令嬢。  
気が強く、幼い頃から  
フィリエルに想いを寄  
せている。

## グロット

ラストール魔法学園の教  
師。貴族であることを鼻に  
かけた、陰湿で嫌な性格。

## セシル

ユイの兄で、カル口の双子の  
兄。優しく落ち着いた性格で、  
かなりのシスコン。

## カル口

ユイの兄で、セシルの双子の  
弟。セシルとは対照的に快活  
な性格をしている。



# リーフェ の祝福

無属性魔法しか使えない

落ちこぼれとして

ほっといてください

# 1

## Contents

---

---

- 006 プロローグ
- 015 第一話【新しい生活】
- 035 第二話【進路】
- 039 第三話【ラストール魔法学園】
- 052 第四話【新しい父親】
- 076 第五話【再会】
- 118 第六話【疑惑の試験結果】
- 143 第七話【婚約者候補】
- 155 第八話【実技試験】
- 192 第九話【王宮】
- 250 第十話【母の想いと願い】
- 304 エピローグ
- 
-



## プロローグ



大国ガーラントの中でも古い歴史を持つオプライン家。その昔は王の右腕として貴族内での発言力も強かったが、今となつては見る影もない。特に現当主アーサーは政治の手腕も事業の経営の能力もお世辞にも優れているとは言えなかった。そんな家にユイは生まれた。

第三子として、そして初の女の子ということで普通なら蝶よ花よと可愛がられていたはずだった。けれど現実残酷で、ユイはオプラインの落ちこぼれとして、父親からそれは酷く嫌われていた。到底自分の子供に向けるものではない、嫌悪と言つてもおかしくない態度であつた。

元々家族に対して甘い人ではなかったが、上の兄二人には厳しいながらも話をしたりしていた一方で、ユイが声をかけようものなら烈火のごとく怒られる。

幼いながらに嫌われていることは分かっていたが、何故嫌われているかまでは分からない。母親も兄二人もユイに気を遣<sup>つか</sup>つてか教えなかった。

いざれ知ることになるのだから、それまでは気負いなく過ごしてほしかったのだろう。滅多に外出を許されなかったユイの憩<sup>いと</sup>いの場は、邸宅内の書庫だった。

幼いながらに本から知識を手に入れることを覚えたユイは、自分が魔法を使うのに欠陥のある『リーフェ』と呼ばれる落ちこぼれであることを知る。

オプラインは古くから騎士を多く輩出してきた家。

生まれながらに欠陥のあったユイは父親にとって、そしてオブラインにとって許せない存在だったのだろう。

だからユイは頑張った。魔法で結果が残せないなら勉強でと。

たくさんの本を読み、知識を身につけ、貴族の通う学校でも筆記試験では一番になるほどの結果を残した。

けれど落ちこぼれである事實は消えず、学校でもユイは嘲笑われ、蔑まれていた。

父親も筆記の成績がいいだけでは態度が変わることはなく、父親の愛情とは無縁に過ごすことになる。

時には暴力を振るわれることもあったユイは、騒がしくするとさらに怒られることから、感情を表に出さないようになっていった。

だが、そんな生活は唐突に終わりを告げる。

「えっ、どういうこと、母様？」

父親とは違い、リーフェであつてもたくさんの愛情を与えてくれる母親のシエリナは、悲しげな顔で先程と同じ言葉を口にした。

「あの人とは離婚することになったのよ。ユイと私はこの家を出ていかなければならないわ」

「どうして……？」

いや、ユイはなんとなく分かっている。

「私のせい？ 私がリーフェだから。この家の役に立たないから……」

「違うわ！」

シエリナは自分を責めるユイをたしなめるように否定した。

「あの人と私が元から仲が悪かったのはユイも気付いているでしょう？」

「……うん」

躊躇ためらいつつユイは頷うなずいた。

元々シエリナは平民の出身だ。実家はパン屋さんを営んでいて、貴族と結婚できるような家柄ではなかった。

それが、ユイの父親アーサーに見初みそめられた。

シエリナに結婚の意思はなかったのだが、店の存続を盾たもとに脅おどされて、嫌々結婚したという経緯があった。

そんな始まりで夫婦仲がいいはずはなく、アーサーとシエリナが言い争う場面を子供達は昔から見ていた。

「こんなこと、まだ子供のユイに言うのはどうかと思うけど、ユイは賢い子だから大丈夫ね。あの人には他にいい人がいるらしいのよ。なんの後見もない平民の女はもう用なしらしいわ。だから私  
は実家に帰ることにしたの。ユイは私と一緒に来てくれる？」

「うん！」

即答すると、シエリナは優しくユイを抱き締めた。

「ありがとう。本当はセシルとカル口も連れていきたかったんだけど……」

「兄様達は一緒じゃないの？」

シエリナは悔しげな顔をする。

「あの子達はこの家の大事な後継者だからと、連れていくことを許されなかったわ」

「そんな……」

ユイはシェリナから離れると、そのまま部屋を飛び出し、兄達の部屋へと走った。

ノックもなく扉を開けて入ると、そこにはユイの大好きな兄二人がいつもと変わらない様子でいた。まだ両親が離婚して母親とユイが出ていくことなど知らされていないのかと思うほど平靜だ。

「兄様……」

「どうしたの、ユイ？」

「そんな慌ててなんかあったか？」

双子である兄のセシルとカルロは一見すると見間違えてしまうほどよく似ているが、セシルはダークブラウンの髪に群青色の瞳、ユイの母親に似た優しく落ち着いた雰囲気を持ち、カルロはセシルと同じ髪と目の色をしているが明るく快活そうな雰囲気をしており、性格も正反対。

慣れた者が見れば、すぐに二人の違いには気付くだろう。

三つ年上の兄二人の顔を見たユイはもうすぐ会えなくなるのかと思つて涙がぼろぼろと零れた。

それに驚いたのは兄達だ。友人からシスコンの称号を得て喜ぶような二人の兄は、ユイのことになると過保護をいかんなく発揮する。

「どどどどうしたんだ!？」

「どこか痛いのか？」

あたふたする兄達に、ユイは言葉に詰まりながら説明する。

「母様が離婚するって。この家出ていかなきゃ駄目って。でも兄様達は一緒に行けないって」

嗚咽おえつを殺しながらそう口にする、二人も理由が分かったのか納得した顔をする。

「あー、そのこと聞いたのか」

ユイの予想に反してカルロはケロリとしている。

セシルも苦笑を浮かべただけで、ハンカチでユイの顔を拭う。

そこにはユイのような悲しみは浮かんでおらず、ユイはそのことに酷いショックを受けた。

「兄様達は悲しくないの？」

再び涙腺が決壊したユイが責めるように問うと、カルロは慌てて否定する。

「そんなことないぞ！ 母様とユイと一緒に暮らせなくなるのはすっごく悲しい」

「全然そう見えない」

最愛の妹に責めるような目で見られてカルロはたじろぐが、いつも冷静なセシルは静かにユイの涙を拭いて、ユイの誤解を解く言葉を発した。

「ユイ、俺達が悲しんでるように見えないのは、悲しむ必要なんてないからだよ」

「どうして？」

「別にこれが今生こんじょうの別れになるわけじゃないからね。そんなことよりユイがこの家にいることが俺達の問題だと思っっているんだ。父様は相変わらずユイにきつく当たるし、この間なんて頬を叩かれていただろう？」

「それは私が声をかけたりしたから……」

「それが問題だって言っているんだ。どこの世界に声をかけただけで叩く父親がいるんだ。このままこの家にいたら、いつか取り返しつかないことになりかねない。母様の他に浮気相手がいたっ

ていうのは許せないけど、これは千載一遇せんざいいちぐうのチャンスだよ。この家から解放された方がユイのためになる。母様もそう思ったから、俺達を残す決断をしてでも出ていくことにしたんだ」

「じゃあ、やっぱり私のせい……」

セシルはそつとユイの頭を撫でた。

「そうじゃない。ユイのせいじゃなく、ユイのためだ。そこを間違えてはいけないよ」

「私のため？」

確認するように問えば、セシルは頷き、カルロは歯を見せて笑う。

「そつ。ユイは気にせず母様と出ていけばいいんだ。俺達も頻繁に会いに行くし」

「兄様達と会えなくなるわけじゃないの？」

「あたりまえだろう」

てつきり会えなくなると思っていたユイは涙も引っ込んだ。

「ちよくちよく会いに行くよ。だから安心して」

セシルにもそう言われてユイは安堵したのだが……。

「問題は俺達よりあっちの方だからね」

「だな」

きよとんと首を傾かしげたユイに、兄二人はクスクスと笑う。

「忘れたらかわいそうだよ。連絡はしておいたから明日にでも隠れ家に行こう」

隠れ家と聞いてユイははっとした。大事なあの人を忘れていたことを思い出したのだ。

翌日ユイ達がやってきたのは、貴族街にある今は誰も住んでいない大きな屋敷。

誰も住んでいないが定期的に手入れがされていて、見た目は古くても汚れてはいない。

綺麗に整えられた庭園に向かうと、その人物の姿が見えてユイは走った。

「エル！」

親しげに胸に飛び込んでくるユイを、その少年は優しい笑みを浮かべながら手を広げて受け止める。

「ユイ」

ユイはリーフェ故か、貴族の通う学校でも落ちこぼれと嘲笑され蔑まれていたので、友人というものではできず、一人でいることが多かった。

その学校も、ユイがオプライン家から出たら平民の学校に転校することになるのだろう。

学校での生活が原因で無駄に警戒心の強くなったユイが、母親と兄以外で気を許せる数少ない人物が、目の前の少年だ。

兄達と同年の少年は、漆黒の髪とそれに似合う鮮やかな緑色の瞳をしている。

見た目にあまり頓着とんちやくしないユイから見ても整った顔立ちをしていた。

今はまだ中性的な顔立ちだが、もう少し成長すれば精悍せいかんさも出て女性達の目をくぎ付けにするにとだろう。

そんな彼はシスコンを自認する兄二人に負けず劣らずユイに過保護で、第三の兄のような存在だ。

「エル」

今にも泣きそうに瞳を潤ませるユイを見て、少年はぎよっとする。

「ユ、ユイ？」

昨日のカルロのように狼狽<sup>うろた</sup>える少年は、助けを求めるようにセシルとカルロを見たが、二人はひらひらと手を振ると、「じゃ、後は任せたから」と言っ行ってしまった。

助けがないことを悟ると、少年は困惑しながらユイの顔を覗き込む。

父親の影響で感情を表に出すのが苦手なユイが泣くのは珍しい。

逆を言えば、ユイにとつてこの少年は、こんなにも分かりやすいほど素直に感情を出すことのできる相手ということでもあった。

「ユイ、どうしたんだ？」

「あのね、父様と母様が離婚するって。それで私は母様と出ていけないといけなくて、兄様達とは離れ離れに暮らさないといけなくなるの」

「そうか……」

ユイの両親が不仲であることは少年も知っていたことなので、その顔に驚きはなかった。

「数日後には貴族街から離れた平民街の母様の実家に行くことになってるの。そうしたらきつとこれまでみたいにエルとこの隠れ家で会うことはできなくなっちゃう」

親しい者の少ないユイにとつて、少年とこの隠れ家で会う時間は心の支えとなっていた。

兄達と暮らせなくなるのは悲しいが、兄達は会いに来てくれると言った。

それを信じているのでユイは辛くはない。

けれど、この目の前の少年は平民街に来ることが難しいことをユイはよく分かっていた。

だからこの隠れ家が唯一ゆつくりと会える場所だったのだが、平民街に暮らすようになったら、ユイも貴族街にあるこの隠れ家に来ることは難しい。

貴族街との境界線には門番がおり、検問がされるので、平民は足を踏み入れづらいのだ。

決して入れないわけではないが、平民が頻繁に誰も住んでいないはずの家に入りしていたら目立ってしまう。それはきっと少年にも兄達にも迷惑をかけてしまうことになる。それをユイは望まない。

けれど、少年と会えなくなることはもつと嫌だった。

とうとう耐え切れず、ユイはまた涙を零す。

「うう。エルと会えなくなるのやだ……」

少年は困ったようにユイを抱き締め、ぼんぼんと背を叩く。

「ユイ」

少年の優しい声がユイの耳に入ってくる。何故か心が落ち着く少年の声。

三人目の兄のようであつてどこか違う、この感情を伝える言葉をユイはまだ持っていなかった。

ユイの体を離れた少年がポケットから取り出したのは二つのペンダント。

ガーラントの国花でもあるエルフィーの花が彫られたペンダントは、二つを合わせると一つの模様になるようになっていた。

それぞれ、少年の瞳の色である緑色の石と、ユイの瞳の色である水色の石がはめ込まれていた。

「綺麗……」

「気に入ったか？」

「うん」

「これは二つで一セットなんだ。離れていてもいつか必ず会えるように。俺が側にいない間、これ

がユイを守ってくれる」

そう言つて少年はユイの首に手を回して少年の瞳の色と同じ石がはめ込まれた方のペンダントをかけ、自分はユイの瞳の色の石の方のペンダントを自ら着けた。

「大丈夫だ。必ずまた会いに行くから、待っていてくれ」

「うん。待つてる。私も頑張るから、絶対に会いに来てね」

「ああ」

二人は約束を交わし、別れた。



## 第一話【新しい生活】



なかば追い出されるようにしてオプラインの家を後にしたユイと母親のシェリナは、庶民が暮らす平民街のシェリナの実家である店の前へとやって来た。

当然ではあるがオプライン家の屋敷とは比べるまでもなく小さい家だ。

実はシェリナには内緒で、兄二人と一緒に母の両親を見るために何度か平民街に来たことがあった。

なので、貴族とは大きく違う平民街での人々の暮らしに驚きはしなかったが、自分もこれからここで暮らすのだと思うとなんとも不思議な気持ちだった。

「ユイ、ここが私の実家よ」

シエリナは、懐かしさを思い出すように空気をいっぱい吸い込んだ。

「いい匂い。お父さんのパンの匂いだわ」

シエリナが言うように、辺りにはパンの焼けるいい香りが漂っていた。

「さあ、行きましょう」

ユイはシエリナに促<sup>うなが</sup>されながら、店の中に入っていく。

「お父さん！ お母さん！」

シエリナが喜びを隠しきれない声で呼ぶと、奥から老年の男性と女性が出てきた。

優しそうな顔立ちの二人をユイは知っている。兄達とこっそり自分達の祖父母の顔を見にきたことがあるからだ。けれど、こんなに間近で見たのは初めてだった。

祖父母は、シエリナの姿を見ると驚いたように大きく目を見開き、動きを止めた。

「シエリナ……。本当にシエリナなのね？」

「そうよ。帰ってくるって手紙を出したでしょう？」

「ええ、そうだけど。本当に帰ってこられるなんて思っていない。もう二度と会えないと思っていたんだから」

シエリナは、ユイの父親であるアーサーにより実家に帰ることを止められていた。

アーサーは社交界にもシエリナを連れていくことはなく、オブラインの屋敷から出すことはほばなかったのだ。

もう、ほとんど軟禁に近かったかもしれない。

ただ、実家と手紙のやり取りはあったようで、祖父母からの手紙が届く度に、シエリナが自分達

に隠れてひっそりと泣いているのをユイと兄達は知っていた。

だからこそ、祖父母がどんな人か見てみたかったのだ。

さすがに貴族の家の子である自分達が孫だと名乗り出るのは、平民街で静かに暮らす祖父母には迷惑になるかもしれないと言いついで出ることができず、遠くからこっそり見るだけだったが。

シエリナは祖母と涙ながらに再会を確かめ合った後、祖父と抱き合い喜びを噛み締めている。

そして、そんな祖父と目が合ったユイはドキリとした。

「シエリナ、その子はまさか……」

「ええ、お父さんとお母さんの孫よ。さあ、ユイ、おじいちゃんとおばあちゃんにご挨拶をして」

「あの……ユイ・オブラインと申します。おじい様とおばあ様にお会いできて嬉しく思います」

そう言うてスカートを軽く持つて頭を下げる。

貴族の令嬢としては極々一般的な挨拶だったが、二人は目を丸くした。

反応のない二人に、なにか変なところがあつただろうかと不安そうにシエリナを見ると、シエリナはクスクスと笑っていた。

「ユイ、あなたはもう伯爵家の娘ではないのだから、貴族のような挨拶はしなくていいのよ。それにおじい様おばあ様ではなく、おじいちゃんとおばあちゃんよ」

「おじいちゃん？ おばあちゃん？」

「そうよ。私のこともこれからは母様ではなくママと呼んでちょうだいね」

「ママ……」

言い慣れないその言葉をユイが確認するように口にすると、シエリナはそれはもう嬉しそうな笑

みを浮かべた。

こんなにも明るい笑顔でユイは見たことがない。

ユイが知るのには優しいながらもどこか寂しげな憂いのある笑顔。

これまでではそれがシェリナだと思っていたが、ここへ帰ってきてからのシェリナの晴れやかな笑顔を見て、母はずつと我慢していたのだなと感じる。

ユイにとってはオプラインの屋敷がユイの家だ。けれど、シェリナにとってはそうではなかったのだと、思い知らされたかのようだった。

それがなんだか悲しくて顔を俯うつむかせるユイに、祖父が視線を合わせるように膝をつく。

「はじめましてだな。俺はオルソ。おじいちゃんだ。年はいくつだ？」

「十二歳です」

「もうそんなになるのか。歓迎するよ、これからよろしく、ユイ」

オルソはニカッと歯を見せた快活な笑顔でユイに手を差し出した。

ユイが戸惑いつつもその手を取って握手をすると、続いて祖母がユイの前にしゃがみ込む。

「おばあちゃんのマリアよ。よろしくね」

二人とも、優しい笑顔でユイを見つめていて、ユイはなんだか気恥ずかしくなりつつ、「よろしくお願いします」と、頭を下げた。

挨拶が終わるや、祖父母はさっさと店を閉めてしまい、ユイ達を家の中に案内した。

お店と自宅を兼ねた家は、奥に行くとりビングになっていた。

シェリナにとっては懐かしの我が家だが、平民の暮らしを知らないユイにはすべてが新鮮だった。

「ユイ、二階に行きましよう。部屋を案内するわ」

シエリナによく似た優しい笑顔の祖母に促されて二階へ上がる。

「ここがユイの部屋よ。帰ってくると手紙で知って、慌てて空いていた部屋を片付けたのだけど、なにか足りない物があつたら言つてね」

ユイの部屋だと見せられた部屋は、これまでユイが使っていたオブラインでの私室に比べるとこぢんまりとしていた。

恐らくこれまでの部屋の半分の大きさもないだろう。けれど、これが一般的な庶民の家だ。

あまりに違う貴族と庶民の生活。ユイはこれからこの生活に慣れなければならない。

けれど、あまり悲観的な感情は浮かんでこなかった。

それは初めて会話した祖父母が、思っていた以上に優しくそうな人達だったからでもある。

それと共に、やっとあの生活から解放されたのだという安心感が心のほとんどを占めていた。

ユイを見るあの恐ろしいまでに冷たい眼差し。

もう、あんな目で見られることはないのだという安堵感。

リーフェであることがそんなに悪かったのか、ユイには分からない。

けれど、少なくとも祖父母はユイがリーフェであることに對して嫌悪感はなかったように思う。

この生活に慣れるのは時間がかかるかもしれないが、やっていけそうな気がした。

ユイは服の中に隠していたペンダントを取り出して、ぎゅっと握り締めた。

少年と同じ瞳の色の石が、彼のことを思い出させてくれる。

「大丈夫」

少年がいつか会いに来ると言ったのだから、その約束があればユイはそれまでここで頑張れる。



こうしてユイの新しい生活が始まったわけだが、初日から戸惑うことばかりだった。

シエリナは元々ここで暮らしていたから、むしろ懐かしいという様子ですぐに馴染んでいたが、ユイは食事をするのにもひと苦労だ。

なにせオプラインの家にいれば使用人が料理から配膳まで準備をしてくれたけれど、ここでは自分達で作らなければ食べられない。

さすがに料理をしたことのないユイにすぐ包丁を触らせることはなく、最初は雑用や料理の配膳から教えられた。

キッチンでは祖母と母が楽しそうに料理を作っているのをユイは不思議な気持ちで見ている。実家に帰ってきてからというもの、シエリナの顔が目に見えて生き生きとしている。

オプラインの家で暮らしていた時は夫であるアーサーとの仲は険悪そのもの。

平民出身のシエリナは、貴族の世界でなんの後ろ盾もなかった。そして、本来ならば彼女を護らなければならない立場のアーサーと不仲故に、使用人達もシエリナには一線を引いていた。

それはリーフェということでアーサーから嫌われていたユイも同様ではある。

けれど、シエリナと違いユイは外に出られたし、兄達や『エル』という何者にも代えがたい存在が心の支えとなっていた。

しかし、シエリナには誰もいなかったのだ。どれだけつらかったことだろうか。やっとシエリナは、心穏やかに暮らせるようになったのだろう。

嬉しそうなシエリナの顔を見て、やはりあの家を出たのは間違いでなかったのだと思う。

だがそれは母に対して言えることで、ユイはちゃんとこの環境でやっていけるか心配だった。

「母様」

「ユイ、母様じゃないでしょう」

「えっと、ママ？」

「なあに？」

そこまで呼び方にこだわらなくてもいいのにと思ったが、平民街で母様などと呼んでいる子供はいないので、ユイが浮いてしまうとやわれれば郷に入っては郷に従うしかない。

貴族のする挨拶もしないようになると言い聞かされたが、気を付けておかないと不意に出てしまう。

すでに馴染んでいるシエリナとは違い、まだまだユイには馴れないことが多かった。

「私、学校はどうするの？」

これまでユイは貴族の通う貴族のための学校に行っていたが、平民となった今、貴族の学校に通うわけにもいかない。

「そうだったわね。その手続きもしておかなきゃね」

「私ちゃんと馴染めるかな？」

「大丈夫よ、心配しなくても」

「でも、私リーフェだし……」

シエリナには言っていないので知らないだろうが、リーフェということで貴族の学校では虐めを受けていたのだ。誰もが、リーフェであるユイを無属性魔法しか使えない落ちこぼれと蔑んでいた。なので、新しい学校でもリーフェが理由で虐められないか心配であった。

そもそもだが、リーフェというのは基本魔法である、火、風、水、地の属性魔法を使えず、補助魔法と言われている無属性魔法しか使えない者の総称だ。

無属性魔法は使えるのだが、無属性魔法は制御がかなり難しく扱いづらい。

大人でもさじを投げる難しい魔法をわざわざ使おうとする者はほほいなしと言っている。

なくてはならないならいざ知らず、無属性魔法は使えなくても生活になんら影響はないのだ。

そんな魔法しか使えないリーフェは役立たずというのが、誰もが持っているリーフェへの評価だ。軽んじられる理由には、リーフェは見た目からして他者とは違うことも要因の一つかもしれない。

目や髪の色素が薄いのがリーフェの特徴だ。

現にユイも、金の混じった薄茶の髪と水色の瞳というように、全体的に色素が薄い。

そんなユイは体型も華奢で、端から見たらなんとも儂はかなげな印象を受ける少女だった。

それ故に弱そうに見えるのだろう。

リーフェであることも相まって、突っかかってくる者は後を絶たなかったのだ。

虐めの内容は陰口ぐらいだったので、休み時間を本と共に過ごし、本の世界に没頭していたユイにはそんな精神攻撃はなんの効果もなかった。

無視を決め込むユイに焦じれて肉体的な攻撃へと発展させる者も中にはいたのだが、落ちこぼれはずのユイから逆に教育的指導を施されたことで、それ以上絡まれなくなった。

そんな者達を全員返り討ちにして、ようやく貴族の学校では虐めもなくなり過ごしやすくなったと思ひ始めたところでの転校だ。

平民の学校ではどうなるか分らないが、また一からやり直しかと思うとげんなりしてくる。

また虐めが起こったとしても甘んじて受け入れる性格ではないのだが、それを知るのは極一部の者だけだ。シエリナですらユイのことを大人しい性格の子と思っている節がある。

なにセオプラインの家では友人を連れてきたことはなく、ずっと書庫に籠もりきりで本の虫と化していたから仕方ない。

学校での虐めもシエリナを心配させまいと話してはいなかったもので、虐めっ子を返り討ちにする際大暴れしたことも知らないはず。だからか、ユイを安心させようと優しく諭す。

「リーフェだなんて気にしなくていいのよ。それに近所にユイと同じ年の子供がいる友人がいるの。明日会いに来てくれるみたいだから、その時にでもユイのことを頼んでみるわ。男の子だけど、顔が広くて人気のある子みたいだから、きつと助けになってくれるわよ」

そんなシエリナの言葉を真に受けたユイは翌日後悔する。

「うわあ、こいつリーフェじゃん」

子供というのは素直で、時に残酷だ。

ユイを指差してからかうように笑う少年は、シエリナの友人の息子で、キアヌと言うらしい。

赤毛が目立つ活発そうな少年は、同じ年齢なのに小柄なユイと比べるとかなり体格がいい。

キアヌは母親に速攻で拳骨けんこつをもらっていた。

「ごめんなさいね、うちの馬鹿息子が」

「いえ、気にしてないです」

そんなことは言われ慣れているので今さらだった。

だが、その一言でユイの中のキアヌの印象が底辺へと落ちていったのは確かだ。

母親達は積もる話もあるのか、おしゃべりに熱中していて、子供は置いてけぼりである。

部屋で本でも読んでいた方がいいなど、背を向けたユイの腕を掴んだのはキアヌだった。

痛いほどに掴まれた手を振り払おうにも相手の力が強く、自然とユイの眼差しも強くなる。

「なに？」

「来いよ」

「やだ」

そんな上から目線で言われて、のこのこついていくユイではない。

なにせ、彼への印象は最底辺なのだから。

しかし、キアヌはその大きな体格にものを言わせてユイをずるずると引っ張っていく。

「ちよつと、止めて！」

「いいから来い！」

すると、おしゃべりに夢中だった母親達がやっと気付いた。

「こら、キアヌ、何してるの!? 女の子は大切に扱いなさいといつも言ってるでしょう！」

母親のことは恐いのか、びくりと体を震わせるキアヌはぶっきらぼうに返す。

「こいつを俺の友達に紹介してやるんだよ」

そんなこと全然頼んでないと、ユイが救いを求めてシエリナを見るが、シエリナは嬉しそうに柔

らかな微笑<sup>ほほえ</sup>みを浮かべている。

「あら、嬉しいわ。この子だったら、この家に来てからもずっと家に籠もって本ばかり読んでもの。  
ユイ、友達をたくさん作ってくるのよ」

ユイの救いを求める手は笑顔ではねのけられてしまった。

ユイは昔から本を読むのが好きな超インドア派である。

元々は無属性魔法をなんとか扱おうとして魔法の勉強をしていたのだが、予想外に魔法はユイの好奇心を大いに満たしてくれた。

段々と専門的な知識を応用できないかと、その行動は研究者じみていき、今ではそこらの学者には負けないくらいの知識を持っている。

それはオブライン家に魔法に関する本が腐るほどあったおかげではあるが、高価なはずの魔法書が何故か平民であるこの家の屋根裏にもたくさんあったのだ。

なので、ユイは目を輝かせて家に引き籠もっていたのだが、ユイの知識量を知らないシエリナは、ユイのことをただの本好きとしか思っていなかった。

それが今回災いし、泣く泣くキアヌに引きずられ、どこぞの空き地へと連れて来られてしまった。そこにはユイやキアヌと同年代ぐらいの子供達がたくさんおり、思い思いに遊んでいた。

そんな子供達はキアヌが来ると目を輝かせて集まってくる。

どうやら人気があるというのは間違いいではないようだ。何故こんな強引な少年が人気なのかは、ユイにはどうにも理解できない。しかし、子供達はキアヌが現れたことに喜んでいた。

「キアヌ、鬼ごっこしようぜ」

「えー、泥団子投げしようよ」

次から次へと騒ぐ子供達はすぐにキアヌが連れているユイに気が付いた。

「ところでその子誰だよ？」

「パンの店のじいさんの孫だつてさ」

「あー、知ってる。じいさんの娘が貴族に追い出されて出戻ってきたって大人が言ってた」

ユイと同年代の少年のその言葉にユイは苛立いらだつ。まるでシエリナを侮辱されたように感じたのだ。しかし、少年はユイの感情には気付かずになおも話を続ける。

「なにに、じゃあ、その子は貴族なの？」

「いや、家を追い出されたんだからもう違うだろ。それにその子つてリーフェじゃん。それで父親に捨てられたんじゃないの？」

「リーフェって？」

「俺知ってる。落ちこぼれのリーフェだよ。無属性魔法しか使えないの」

「えっ、他の属性使えないの？」

「そうそう。だから父親に捨てられたんだぜ、きつとさ」

「うわー、かわいそう」

かわいそうなどと言っているが、その顔は弱い獲物を見つけた猛獣のように楽しんでいる。

「キアヌ、なんでそんな奴連れて来たんだよ。俺達にまで弱いのがうつるじゃんか」

「落ちこぼれは仲間になって入れてやらねえよ。恨むならリーフェに産んだママを恨め」

ぐっと手を握り締めるユイが口を開く。

自分のことはいい。けれど、シエリナのことを悪く言われるのは我慢がならない。

「……さい」

「えっ、なんだって？」

「聞こえませーん。ぎゃははは」

ユイの声は小さすぎて彼らには聞こえなかったよう。

それすらからかいのネタにする彼らに、ユイはもう一度はつきりと言ってやった。

「うるさいって言ったの。くだらないことで優位に立ったつもりでいる、おつむの弱いあなた達の

言葉を聞いていたら馬鹿がうつる」

一瞬の静寂。

しかし、次の瞬間には、少年達は顔を真っ赤にして詰め寄ってくる。

「はあ!? 落ちこぼれが誰に言ってるんだよ！」

「弱いくせにいきがんなよ！」

ユイはそんな彼らを見て、鼻で笑ってやった。それはもうかわいそうな者を見下すような顔で。

「凶星さされたから悔しいの？」

「なっ！ おい、やっちゃおうぜ」

「身の程を教えてやる！」

そう言うと、彼らはそれぞれ魔法を使い、その手には火の玉や水の玉が現れる。

「泣いて謝るなら今のうちだぞ」

脅しをかける彼らに、ユイはさらに追い打ちをかける言葉を投げつけた。

「やるならやれば。その程度の魔法しか使えないくせに偉そうにしないでよ」

「こいつっ！」

あえて挑発するユイの思惑通りに怒りで頭をいっぱいになっている少年達は、いつせいにユイに向かって魔法を放つ。

さすがにヤバイと思った他の子供達が悲鳴を上げたりしているが、ユイはずっと冷静な顔で、向かってくる魔法を見つめていた。

そして、魔法がユイにぶつかろうとした時、それらは一瞬で霧散する。

「えっ？」

なにが起こったか分からない様子の少年達はぼかんとした顔で停止している。

その隙について、ユイは一人の少年との距離を一気に詰めると、彼のお腹に掌底しょうていを叩き込んで地面に沈め、その勢いを殺さぬまま隣にいた少年に回し蹴りをおみまいした。

あつという間に、自分より大きな少年を倒してしまったユイに、その場にいた子供達は時が止まったように固まっている。

ユイは地面に転がった少年達を見下ろし、憎々しげな視線を向けてくる彼らを見て、先程の攻撃程度ではあまりダメージを与えられなかったようだと考えていると、見ていた少年の仲間がユイに詰め寄ってきた。

「こいつっ！」

「やっちまえ！」

怖い顔で近付いてくる少年達に対して、恐れるわけでも顔色を変えるでもなく、ユイは地面の砂

を一握り手にした。

サラサラと砂を手からこぼしながら、そこに魔力を流しつつ小さく詠唱の言葉を口にし、ふうつと息を吹きかける。

それは流れるように少年達を取り巻き、あつという間に彼らを包み込み砂嵐と化した。

ごうごうと吹き荒ぶ砂嵐の中で少年達は泣き叫ぶ。

「ぎゃあああ！」

「助けてえ、ごめんなさいいいい」

涙と砂で顔をぐしゃぐしゃにした少年達には、先程までの威勢の良さは一切ない。

そろそろ止めようか……。

しかし彼らに投げかけられた言葉を思い出して、怒りが再燃したユイは少しの逡巡しゆんじゆんの後、「もうちょっとだけ」と継続することにした。

その間も周囲に響き渡る泣き声と叫び声。そして戸惑う周囲の子供達。

彼らはどうしたらいいか分からずに立ち尽くしていた。すると……。

「なにをしとるんだ！」

はっとして振り返ると、買い物帰りなのか大きな紙袋を持ったユイの祖父オルソがいた。

オルソが怒った顔で近付いてくるので、ユイは慌てて魔法を止める。

すると顔をぐしゃぐしゃにしながら少年達が地面に座り込み、全員嗚咽をもらし、ひたすら怯えている。

ちよっとやりすぎたかとユイは思ったが、今は少年達のことを考えている余裕はない。

オルソにどう言い訳をしようか。

「なにをしていたんだ!？」

オルソの質問に誰一人答えない。いや、答えられないと言った方が正しいかもしれない。事実、なにが起ったのか理解できている者がいないのだ。只一人、ユイ以外は。

ユイが見つかったばつの悪さで視線をそらしていると、それをオルソに見咎められる。

「ユイ、なにがあつた?」

「えっと……」

ユイが言葉に詰まっていると、泣きじゃくる少年の一人がユイを指さして叫んだ。

「そいつがやったんだ! リーフエのくせに化け物みたいな力を使って俺らを殺そうとした!」

「本当か?」

オルソは半信半疑という様子。

まあ、無理もない。ユイはリーフエなのだから、普通は魔法が使えるとは思わないだろう。

「えっと……」

「どうなんだ?」

ユイは怒られるのを覚悟で頷いた。だが、たとえ怒られたとしても後悔はない。

「母様を侮辱されたの。それで怒ってちよつとしたお仕置きを……」

「ちよつとのように見えんのだが」

砂だらけになった泣き顔の少年達を見て、オルソは少し困ったような顔をする。

しかし、ユイとてここで引くわけにはいかない。

「父様に捨てられたって言ったの。恨むならリーフェに産んだ母様のことを恨めって。それで我慢できなくて」

「……それなら仕方ないな」

予想外にもオルソはあっさりと言いの言い分を支持した。

その顔には笑みが浮かんでいるが、うつすらと怒りが見え隠れしている。

「おい、お前達！ 今度うちの娘と孫を侮辱したならユイが手を出す前に俺が手を下してやる。二度とするなよ、分かったな？」

「ひうっ」

そばにいたユイもびくりとするほどの迫力に、少年達は顔を青ざめさせながらこくこくと頷いた。

「よし。なら行くぞ、ユイ」

「は、はい」

背を向けるオルソに慌ててついて行く。

その道すがら、オルソに問いかけられた。

「ユイは魔法が使えるのか？」

「うん。リーフェだから無属性魔法しか使えないけど」

「その年で無属性魔法が使えるだけでたいしたもんだ。それだけ使えるなら、その力を父親に見せれば認められたんじゃないのか？」

途端にユイの表情が暗くなる。

「……見せたことはないけど、使えるとは言ったことある」

「そしたら？」

「だからなんだって。無属性魔法を使えようがお前がリーフェであることに変わりはないって、認めてもらえなかった……」

「そうか……」

沈黙が落ちる。だが、すぐに空気を変えるようにオルソが話題を変えた。

「ユイは家の本を読んでもうだな。かなり難しい専門的な本なんだが、読めるのか？」

「うん。オプラインの家にはたくさん本があったから勉強した。魔法のね、研究してるの」

「魔法の研究か。どんな研究してるんだ？」

「新しい魔法とか、構築式とかかな。無属性の魔法は研究してる人が少ないから新しい発見がたくさんあって楽しいよ」

「どういう研究をしているのか、おじいちゃんに見せてくれるか？」

「うん」

家へと帰ったユイは、荷物を置いたオルソを連れて自分の部屋へ。

そして、積み上げられたノートの一冊をオルソに見せる。

そこはびつしりと書かれた専門用語と、魔法の構築式で埋め尽くされていた。

正直、ユイはオルソには分からないだろうと思っていた。なにせユイが研究している無属性魔法はかなり複雑難解で研究者ですらさじを投げるぐらいのレベルなのだ。

そもそも、無属性魔法は重要視されていないから理解できる者が少ないとも言う。

しかし、読むにつれ表情を変えていくオルソに、見せるのはまずかったらうかと不安になる。

「これは、すべてユイが書いたのか？」

「うん……」

「すごいな……」

溜息を吐くように呟く。

「おじいちゃん？」

「いや、本当にすごい。これほどの内容をユイほどの年の子供が理解し研究しているなど」

オルソはノートを元に戻し、ユイと視線を合わせるようにしゃがむ。

「ユイ、これを世に出したらお前の父親も考えを変えるかもしれない。それぐらいすごいものだ。だが、今はまだこれは誰にも見せてはいけない。そうでなければまだ子供のユイは大人に利用されてしまう。ちゃんと庇護ひごしてくれる者が現れるまで、これはおじいちゃんとの秘密だ。意味が分かるか？」

「うん。分かった。テオ爺様じいさまもおじいちゃんと同じこと言ってたから、ちゃんと意味が分かるよ」

「テオ爺？」

「と、友達のおじい様」

慌ててそう言ったユイは内心ドキドキしていた。

テオ爺は大好きな『エル』の祖父なのだが、彼の本当の立場をオルソに言うわけにはいかない。けれどオルソは、「テオ……」と呟きながら、苦虫をかみつぶしたような顔をしていた。

「おじいちゃん？」

「いや、なんでもない」

「そう？ ……ねえ、おじいちゃん」

「なんだ？」

「この研究のことは秘密だけど、魔法は使ってもいいよね？ 今日みたいなお馬鹿な子が難癖つけてきたりした時とか。兄様も、そういう輩やからには容赦するなって言ってたし」

「そうだな。確かもうすぐ学校に行くんだったな。リーフェということでからんでくる馬鹿も多いだろう。その時は遠慮せずやってしまえ」

ニカッと笑ったオルソを見て、ユイもにこりと笑みを浮かべ頷いた。

「うん」

「……ただし、ほどほどにな」

「大丈夫。貴族の学校でも母様にはばれないように上手くやってたから」

「そりゃ頼もしい。だが、母様ではなくママだぞ」

「あつ……」

ずっと『母様』と言っていることに気が付いた。やはりまだ慣れるのには時間がかかりそうである。

だが、オルソからのお許しが出たことで、少しユイの気分は楽になった。

そして学校へ初登校する日。何の因果かキアヌと同じクラスとなったユイだったが、ほかにも見覚えのある顔がちらほら。彼らは一樣に顔色を悪くさせていた。

どうやら何かをする必要はないかもしれない。幸先のいいスタートだった。



## 第二話【進路】



ユイがオブラインの家を出てから三年の月日が経った。

庶民の生活にも慣れ、初等学校から中等学校へ進学し、そこでは親友と呼べる友人達とも出会え、ユイはなんだかんだで庶民の生活を満喫していた。

なにより祖父の作るパンの美味おいしいことと言ったらない。パンに限らずお菓子も美味しく作ってくれるので、甘い物がこの世で一番好きなユイは完全に胃袋を掴まれてしまった。

毎食店の残り物が食卓に並ぶが、朝食は焼き立てのパンが食べられるので、ユイにとって一日で最も幸福な時間となっている。

この三年でシェリナにはレイスという婚約者ができた。しかも今度も平民ではなく伯爵位を持つ貴族だというのだから驚きである。シェリナはもう貴族とは関わりたくないと常々口にしていたのに。

そんなレイスと婚約したのはつい最近のこと。しかしシェリナが実家へと帰ってきてからは店の近くで度々目撃うかがしてユイは知っていた。

遠目に店を窺うかがう不審者にユイは最初の内は警戒していたのだが、どうやら元々好意を持っているシェリナが離婚して実家に帰ってきたという情報を手にして、アタックしようとやってきたものの尻込みして不審者と化していたようだ。

次第に店の中に入ってシエリナと会話できるようになり、ようやくレイスの悲願が叶ったのが最近のこと。ユイが中等学校を卒業したら式を挙げるらしい。

そんなユイの目下の悩みは進路に關してだ。

「うう〜」

ユイがたくさんの書類の前で頭を抱えて悩んでいると、シエリナが苦笑しながらやってきた。

「ユイったら、まだ悩んでいるの?」

「だって、ママ」

この三年で『ママ』という呼び方も定着した。

「それにしてもすごい数集めたわね。これ全部進路の学校の候補?」

「うん」

ユイの前に並べられた書類はすべて学校の案内。

ユイの住まうガールラントでは、初等学校と中等学校が義務教育であり、すべての国民が通うが、その後の進路は様々。そのまま働く者もいるが、半数はその上の学校へ通う。

なりたい職業に適した技術を専門に学ぶ学校へ行く者がほとんどだ。

ユイはこの三年でパン職人である祖父の跡を継ぐ決心をし、パン作りを学ぶ学校を望んでいたのだが、ここで想定外のことが起こる。

中等学校では全国の学生を対象にした大きな大会が行われる。それは魔法や体術を使った対戦形式のもので、上位入賞者は『三校』への推薦入学ができるのだ。

この三校とは魔法を専門に学ぶエリート校「魔法学園」で、東にあるダイン、西にあるセレスト、

そして王都のラストールがある。

卒業後は王宮、ギルド、教会といった優れた者しか入ることを許されない機関に所属する者が多いとあって、魔法学園に通うことは一つのステータスとなっており、ほとんどの貴族が通っている。そんな三校の一つであるラストールに、何を間違ったのかユイの推薦入学が認められたのだ。

それはつまり、ユイが中等学校の大会で入賞してしまったということの意味する。

落ちこぼれであるリーフェの入賞は前代未聞でもあり、ちょっととした騒ぎとなった。

それはいいのだが、ラストールに行くつもりもなかったユイにはまったくの想定外。ラストール魔法学園ならユイの大好きな魔法を学べるであって、ユイはパン学校との間で揺れに揺れていた。

「将来のためにパン学校へ行くべきか、ラストール魔法学園に行くべきか……」  
「そりゃあ、ラストール一択に決まってるだろう」

不意に聞こえてきた第三者の声にユイとシェリナは振り返り、顔をほころばせた。

「カルロ兄様！」

「俺もいるよ」

続いて入ってきたのはセシルだ。

「セシル兄様も」

この二人の兄とは最初の一年ほどは会えずにいたが、二人はラストール魔法学園入学を機に、父親からも行動範囲が制限されなくなったのを幸いと、ちよくちよく家に来てくれるようになった。

時には店先に立ち、そのたぐいまれな容姿を生かして道行く女性達をひっかけて、店の売り上げに大いに貢献しているのである。

「進路に迷っているのかい？」

セシルはテーブルに並ぶ案内を一つ手に取ってバラバラとめくる。

「そうなの。おじいちゃんの跡を継ぐならパン学校なんだけど……」

「でもユイはラストールに通いたいと思ってるんだね？」

こくりとユイは頷く。

「ならラストールに行くべきだ」

セシルは断言した。

「ラストールならば、ユイの大好きな魔法の勉強がたくさんできるよ。前にも俺達の教科書を見せてあげたらユイは羨ましそうにしていたじゃない」

それを言われると反論の言葉が喉で詰まる。

ラストールはエリート学校というだけあって、ユイが通う平民の中等学校とは比べるべくもない高度な授業をしていた。

中等学校の授業内容の簡単さに日々物足りなさを感じていたユイには羨ましくてたまらなかった。そして、普通ならいくつかの専門学校に通わなければ取得できない資格なども、ラストールに通うことで一気に取得可能だったりする。

勿論それだけの技能を身に付ける必要があるが、勉強が苦ではないユイには利点しかない。

ただ、やはり魔法学園というだけあって、パンの作り方は教えてくれないのが難点だ。

「パンならおじいちゃんに習えばいいけど、ラストールの教育はそうはいかないでしょう？」

「そうだけど……」

「それにラストールには国立の図書館にも負けない図書室があるんだよ。中には学園にしか置いていない貴重な魔法書とかもね。ユイは見たくないの？」

「在学中は読み放題だぞお。逆に言うのと在学しないと読めない」

ニヤリと笑うカルロ。双子の連携プレーにユイは胸を撃ち抜かれた。

「はう！」

国立の図書館は週四で通うユイのオアシスだ。

けれど、大衆性を重んじているからか、人を選ぶコアな魔法の専門書は限られており、そのほとんどにはもう目を通していた。新しい本が欲しいが、魔法書はべらぼうに高いので庶民暮らしの今おねだりをするわけにもいかないのだ。

まだ果たされていない彼との約束のためにも、ユイはラストールへ通うことを決めた。



### 第三話【ラストール魔法学園】



ユイの朝は忙しい。まだ登校するには早い時間から起きだして、服を着替え、毛先の方が軽くウェーブのかかった薄い茶色の髪を後ろで一つに結び、あの日、彼からもらったペンダントを着ける。

エルと最後に会ってから四年の月日が経ったが、あの日を最後に彼とは会っていない。いや、会いに来てくれないが正しいかもしれない。

少し沈む気持ちを抑え、そろそろ起きて働いているだろう祖父母の手伝いをするため、部屋を後にする。

一階にある店に向かうと、祖父母はせわしなく働き始めていた。

ユイはエプロンを見ると、祖父母の手伝いを始める。

朝から手伝うのはいつものことで、慣れた手付きで準備をしていく。

オルソの作るパンは美味しいと評判で、遠くからわざわざ買いに来る人がいるほどだ。

ある程度お店の手伝いが一段落すると、ユイはエプロンを外して学校に行く準備をしに部屋に戻る。

制服に着替え、結んでいた髪を下ろし、可愛いリボンで髪を結び直す。かばん鞆を持って台所へ向かうと、シエリナがいた。

「おはようママ」

「おはよう、ユイのご飯はできてるわよ」

「ありがとうございます」

椅子に座り食事を食べ始めたユイに、母親のシエリナがニコニコ笑いながら話しかける。

「そうそう、言っていたと思うけど、今日はレイスとの食事会の日だから早く帰ってきてね」

シエリナは無事に婚約していたレイスと再婚し、今は彼の家で生活している。

最初シエリナと新しい父親のレイスからは一緒に暮らそうと言われたのだが、ユイが断固拒否したため、ユイは今まで通り祖父母の家に住み、シエリナとは別々に暮らすようになった。

しかし祖父母は仕事で忙しくユイにまで手が回らない。

今年十六歳になるので自分のことぐらいできると断ったが、シエリナは学校に行くユイに毎朝ご飯を作るために実家に戻って来ている。

そんなことが申し訳なく思いつつも、別々に暮らしていてもちゃんと気にかけてくれている母の心を嬉しく感じていた。

そしてシエリナの言った食事会の日とは、一緒に暮らさない代わりに定期的にレイスの家で食事をする事になっており、今日はその日なのである。

「うん、分かってるよ」

「食事を食べ終え」「ごちそうさま」と言うとお鞆を持ち、玄関に向かう。

「行つてらっしゃい、気を付けてね」

「うん、行つてきます」

ユイは店の出入口とは別の玄関を出て学校へ向かった。



ユイの住むガーラント国は古い歴史があり、昔から優秀な魔術師を多く輩出している。

それにより魔法研究も盛んで、多くの魔具や魔武器が開発され、強大な軍事力を誇る。

軍事力だけに留まらず、国内の肥沃な大地から多くの農作物が取れ、他国へも輸出していた。

そのため、近隣の国々の中でも強い発言力を持つている。

一昔前まではその強さ故、度々争いが行われていたが、先代の国王テオドルにより近隣諸国と

の間に和平交渉がなされ、現国王ベルナルト治世においては平和そのものだ。

ユイが通うことになったラストールの入学資格は中等学校卒業以上で、試験に合格すれば入学でき、そこから五年間勉強することになる。

大会で推薦を得たユイも一応入学試験は受けている。それというのも、ラストールでは試験の評価で能力の優秀な順に、A〜Iとクラスが決められるのだ。

最も優秀な人材が揃っているAクラスからは卒業後、軍やギルド、教会など能力が優れた者しか入れない機関に行く者が多い。

しかし、祖父の跡を継ぐ予定のユイにはまったく関係のない話である。

学園へと到着したユイは、もう入学して三カ月になる見慣れた学園を見渡し、その大きさに毎度のことながら感心してしまう。

国内でも三つしかない魔法学園だけあり、学生の数も多くA〜Cは北棟、D〜Fは東棟、G〜Iは西棟と別々になっている。

東棟・西棟は普通の校舎なのだが、実力があり将来有望な人材が揃っている北棟の校舎は各設備だけでなく食堂まで豪華な造りになっている。

幼い頃から英才教育をされている貴族の子供が多いからというのも理由の一つだろう。

校舎の他にも、講堂や模擬戦を行うコロシウム、魔法の授業や個人練習を行う施設など学園の敷地は広大だ。

それ故、入学したての頃は広すぎる敷地に迷子になる者が続出し、最初の一カ月は教師が巡回するのが恒例になっている。

三か月過ぎた今では迷うことなく西棟に入り、自分のクラスを示すHが書かれた教室に入ることができのだが、敷地が広過ぎて校門からクラスまでが遠く辟易へきえきしてしまう。

「おはよ、ユイ」

「おはよう、ルエルちゃん」

教室に入ると、ユイの友人ルエル・イーデンがいち早くユイに気付いた。

ルエルは髪を頭の上の方で一つに結んだ勝ち気そうな女の子だ。

「おう」

「おはよう」

ルエルの側には短髪でやんちゃな印象を受けるゲイン・クローレー。真つ直ぐな髪でニコニコと人当たりのよさそうな印象のフィニー・バルカスも一緒にいた。

ルエル、ゲイン、フィニーの三人とは中等学校時代からの付き合いだ。

その他にも周囲から挨拶する声が飛んできて、それぞれに返しながらユイは席に着いた。

Hクラスは下から二番目のクラスで優秀ではない部類に入るのだが、その分クラス内での団結力があり皆仲がよかった。リーフェであるユイも最初こそ遠巻きに見られていたが、今では普通に接してくれている。それはユイに対して変わらず仲良くしてくれているこの三人の友人のおかげだろう。

午前中の授業を順調に終え、昼休みを挟んだ午後からは魔法の実践授業が始まるため、屋外へ移動していた。

他のクラスメートは今日はどんな魔法を使うのだろうと話し合っ楽しんでそうにしているのだが、

その中でユイだけが憂鬱そうな表情を浮かべていた。

「いつものことだけど元氣出せよ」

「でも仕方ないよね、毎回見てるだけって退屈だし」

「もういつそ午後は授業しないで帰りたい。おじいちゃんの手伝いしてる方が絶対に良い……」

「まあまあ、ほらお菓子あげるから元氣出して、授業の間こっそり食べるのよ」

「ありがとう！」

ユイの扱いを心得ているルエルがお菓子を渡すと一転して嬉しそうに顔を綻ほころばす。

「じゃあ私達は行ってくるから大人しくしてるのよ」

「うん」

ルエルはまるで子供に言い聞かせる母親のように忠告すると、ゲイン、フィニーと一緒に他のクラスメートが集まっている場所に向かった。

ユイはクラスメートから少し離れ、段差のある場所に座り込んだ。

先生の話を聞いた後、教えられた魔法を使い楽しそうに授業をしている生徒達を遠目に見ながら、ユイはただ見ているだけの退屈さに魔法学園に入ったのは失敗だったかなと思っていた。

基本的にリーフェは魔術師として落ちこぼれと認識されており、魔法以外を勉強する他の学校がある中、魔法をわざわざ学ぼうとする者も少ないので魔法学園に進むリーフェは三校を合わせても十人に届かない。

そのため、基本の四属性を勉強する実技の授業がほとんどで無属性の授業は行われず、ユイはいつも見学することとなっていた。

二年になれば選択授業で無属性の授業があるが、あまり力を入れていないようで、結局独学でなんとかするしかなさそうさ。

まあ、それならそれでいい。これまでも独学で魔法の研究をしてきたのだ。この学校には無属性魔法に関する書物もたくさんあるので、勉強する環境としては問題がなかった。

ただ、この無駄な時間だけは我慢がならない。この時間にいったいどれだけの本が読めるかと考えるとまったくなくて仕方ない。これまでは一応大人しく見学していたが、そろそろ限界である。

「よし、サボろう」

ユイは少し焦<sup>あせ</sup>っていた。彼との約束の日から四年。彼のために始めた研究は一定の成果を出すことができたが、本当に得たい成果は出ずに行き詰まっていた。

学園の授業は確かに高度だが、ユイには易しすぎた。

それはHクラスという後ろから二番目の、学園内では落ちこぼれに分類されるクラスになったからという理由もある。リーフェなので実技の試験は捨てたも同然だったため、これは仕方ない。

Aクラスのようなエリート中のエリートが集まるクラスと比べると、授業の内容は甘く設定されていたのだ。だからといってAクラスに入りたいとは思わないが。

Aクラスになった友人の話では、クラス内は殺伐<sup>さつぱつ</sup>としていて、かなりの競争社会らしい。

Hクラスの緩い雰囲気が好きなのはユイはなんとしても遠慮しなかった。それにAクラスは課題も多く、それでは研究をする時間が減ってしまう。ユイにとっては大問題だ。

ユイはゆっくり立ち上がると、サボるべく授業をしているクラスメイト達に背を向けた。その時。

「おい」

突然声をかけられて誰だとユイが振り返ると……。

目尻の吊り上がった、見るからに偉そうな態度の上級生の男が後ろに数人引き連れ立っていた。学年とクラスは制服のネクタイの色とそこにあるラインの本数で分けられていて、そこからすぐに三年のAクラスに所属している生徒だと分かった。

「お前がユイ・カーティスか？」

「そうですね何か？」

あからさまな高圧的な話し方に気分が悪くなり眉をひそめるが、一応上級生ということでユイは敬語で話した。

「へえ、悪くないな、俺はバツツ男爵家のノレ・バツツだ。お前、今日から俺の女にしてやるよ」

「……はっ？」

呆気にとられるユイは、きつと聞き違いだろうとまじまじと目の前の男の顔を見る。

「嬉しいだろ、俺が直々に付き合ってやるって誘いにきてやったんだ」

残念ながら聞き違いではないらしく、ユイはなんと返したのか言葉を探す。

「え、遠慮しておきます」

初対面から告白、しかも上から目線というあまりに非常識な男に、ユイはなんとかその言葉だけ絞り出した。

「恥ずかしがらなくていい」

「いやいや、恥ずかしがってるんじゃないんで……」

「そうか、きつと俺が貴族だから身分不相応だと思ってるんだらう？ 気にするな、俺は懐の広い

男だからな」

どこからその自信が来るのか、いつそあつぱれである。

どうやらヤバイ奴に捕まってしまったらしい。そもそも今は授業中だろうにこの人達はなにをし  
ているのか。

「まあ、サボろうとしていたユイが言えたことではないのだが。

三年の担任の先生にサボって女の子口説きに来てます、と言ったら引き取ってくれるだろうか  
……。などと考えていると。

「おい、聞いているのか！」

初対面の人間から偉そうに怒鳴りつけられてユイも機嫌が悪くなる。

「聞いてますよ。とりあえず、あなたとは付き合いません。先に初対面の人に対する礼儀を学ん  
できてください。というか授業サボって何してるんですか？ 先生にチクりますよ？」

最後の一言が効いたのか、男は顔を真っ赤にする。

「なんだと！ 貴族の俺が庶民と付き合ってやると言ってるんだ、来い！」

怒鳴りながらユイの手首を乱暴に掴まれ、その力の強さに思わず声が出る。

「いたっ、やめて！」

相手は年上の男。体格的にもユイに勝ち目はなく、振り払えない。

「ふん、リーフェごときが勝てると思ってるのか！」

こういう輩には一発食らわせて強制的に静かにさせてやろうと思ったその時……。

「ちよっとあんた、ユイに何するのよ!!」

授業中のルエルが不穏な気配を察知し、恐ろしい速さで走ってきてノレに跳び蹴りを食らわした。

「ぐへっ！」

ノレはそのまま吹っ飛ばされ壁に激突。ルエルの方はスタツと綺麗に着地した。

「お見事」

華麗な跳び蹴りに、騒動に気付いたクラスメート達から思わず拍手が。

「なっ、何をする！ 俺は男爵家の——」

「だったらなんだって言うのよ!? 大体貴族だっけ言うんだっけもって紳士的に口説きなさいよ。そんな上から目線であんたの女になるわけないでしょ！ 自分はモテるって勘違いするのはいいけど、他人に……特にユイに迷惑かけるんじゃないわよ!!」

ルエルのあまりの迫力にノレは完全に腰が引けているが、最後の意地か口だけは回った。

「こんなことをしてただですむと思っているのか！」

「ありきたりな返しね。もっと気の利いた捨て台詞吐いたらどうなの」

「くっ、この庶民がっ！」

「あれ、そんなこと言ってもいいのかなあ？」

「なっなんだ」

横から人のよさそうな笑みを浮かべたフィニーが現れ、及び腰のノレの耳に口を近付け、何かを囁ささいている。

ノレはユイの方に視線を向けると、次第に顔が青ざめブルブルと震えだした。

かと思つたら、そのまま怯えながら逃げるように立ち去ってしまう。ノレが連れていた生徒達も

慌てて後を追う。

「何言ったの？」

「ナイシヨ」

自分の顔を見て怯えて去ったことを不審に思ったが、フィニーは笑顔で答えない。

こうなると何を言っても無駄だと、数年の付き合いの中で理解していたユイは、聞き出すのは諦めて助けてくれたルエルにお礼を言う。

「ありがとう、ルエルちゃん」

「いいのよ、ユイが無事なら」

ユイの無事を喜び保護者のように抱きつくルエルに、ゲインとフィニーの男二人はというと。

「男前だね、ルエルは」

「だな」

思わず惚れてしまいそうになる勇敢なルエルの行動に感嘆したのだった。

そんなちよっとした事件はあったものの、その後は何事もなく放課後になった。

「それにしてもあいつ思い出しでも腹が立つ、もう一発蹴っておけばよかった」

「あれだけやりゃあ十分だろ、殺す気か」

血気盛んなルエルにゲインもドン引きである。あれ以上はノレの命がヤバイ。

すると、いつもどこからか情報を仕入れてくる情報通のフィニーから補足情報が。

「あれでも一部には人気があるらしいよ。一応男爵家の嫡男だし、バツツ家はそれなりに資産があつて、頭と性格は悪そうだけど顔はそれなりみたいだし」

「あれが!? 私なら絶対無理だわ、趣味が悪すぎる」

ルエルが信じられないと驚愕の声を上げるその横で、ユイもうんうんと頷く。

「ユイ、お前ってよく変なのに好かれるよな」

「全然嬉しくない」

「そう言えばユイ、今日は早く帰らないと駄目なんじゃなかった?」

ルエルに言われ思い出したユイが時計を見ると、思っていたより時間が過ぎていた。

「そうだった、ごめん先に帰るね。バイバイ」

「バイバイ」

「おー、気を付けて帰れよ」

「またね」

すぐに荷物をまとめると急いで教室を後にした。



ユイが帰った後、ルエルはまだ腹の虫がおさまらない。

ユイがからまれるのは今日が初めてではなかった。良い意味でも悪い意味でも。

ユイは感情が表情に出にくいのが、その容姿は一般的に見ても可愛かった。

リーフェの身体的特徴そのままに、ユイの少し金色が混じったような薄い茶色の髪に水色の瞳は、まるでお人形のように愛らしい。

リーフェでない一般的な人は濃いめの茶髪や赤毛や黒髪が多く、瞳の色も濃い色がほとんどだ。美人というより可愛いユイの容姿は、リーフェ特有の色素の薄さのせいかわげな印象で、守ってあげたいと庇護欲をかきたてられる雰囲気を持っている。

しかも、普段表情は乏しいが、親しい人だけに見せる笑顔は破壊力抜群。それを見て人知れず好意を持っている者は少なくない。

クラス内にも不穏分子は片手では足りないというエルはみている。

それとは別で、リーフェであることから難癖をつけてくる者もルエルは散々見てきた。中には、ノレのように暴力的な者もいたが、そこは毎度ルエルが一網打尽にしていた。

きつと今後も湧いてくるだろう。溜息を吐きフィニーに視線を向けると聞いた。

「ねえフィニー、あんたあの貴族になんて言って黙らせたのよ。かなり怯えてたけど」

「ああいう権力振りかざす奴は、俺ら庶民が何か言ったってなかなか引き下がらないのにな」  
「簡単だよ。ユイを溺愛てきあいしてる。魔王様まおうさまのことを話しただけ」

フィニーはニコニコと笑いながら答えた。

「あー、なるほど、その手があったわね」

「そりゃ誰だって怯えて逃げ出すな。ちょっと……いや、かなりあいつが可哀想になってきたかも」

「魔王様」の恐ろしさを知るルエルは満足そうな顔をし、ゲインは史上最凶の人物を敵に回しただろうノレに憐れみを感じるのだった。